カツオ魚群に付く鳥類

杉 崎 一 雄*

Summary

Birds which follow the shoal of Bonitoes in waters south of Japan

Kazuo, Sugizaki

Birds which follow the shoal of Bonitoes *Katsuwonus pelamis* were counted on the fishing-grounds in 1960-61. As an indicator of the shoal of Bonitoes, 5 species (Wedgetailed Shearwater *Puffinus pacificus*, Sooty Tern *Sterua fuscata*, Noddy *Anous stolidus*, Red-legged Gannet *Sula sula* and Brown Gannet *Sula leucogaster*) were important in the sea near Mariana Is., 2 species (Streaked Shearwater *Calonectris leucomelas* and Sooty Tern) were important south of Izu Is. (between 31° N and 32° N) and 2 species (Wedgetailed Shearwater and Streaked Shearwater) were important on the "Higashi-Oki" (145° E, 35° N). But on the sea near Sofugan, there was no bird which follows the shoal of Bonitoes.

筆者は1960—61年に5回にわたり当業のカツオ漁船に乗船し、鳥付魚群の調査を行なった。ここに、その際観察した「魚群に付く鳥類」について報告する。一般に魚群に付く鳥類は魚群の発見の指標として極めて重要であるが、従来鳥種やその個体数を報告した例を殆んど見ない。報告にあたり、乗船中諸事に便宜を与えて下さった各船の船主、船員諸氏及び東京水産大学の故熊凝武晴教授、妹尾次郎教授に深く御礼申し上げる。

操業の概要

航海の概要については杉崎(1968)を参照されたい。操業の概要は下記の通りである。操業場所は Fig. 1 に示した。

航海 ① 1960年7月19~26日、硫黄島近海及びマリアナ諸島近海でカツオ *Katsuwonus pelamis* を対象に操業。水揚げは23トン。

* 東京都大田区大森第三中学校

Fig. 1 Fishing-grounds of
5 voyages.

航海 ② 1960年8月8～19日に①と同様に操業。水揚げ高は20トン。

航海 ③ 1961年5月26～28日、銭州ペヨネーズ列岩及びソーフ岩付近でカツオを対象に操業。水揚げ高は18トン。

航海 ④ 1961年6月1～4日、西の瀬及びソーフ岩付近でカツオを対象に操業。水揚げ高は18トン。

航海 ⑤ 1961年7月1～3日、東沖 (145°E, 35°N) でビンナガ *Thunus alalunga* を対象に操業。水揚げ高は1トン。途中エンジン不調で操業中止。

結 果

各航海毎に記述する。指標として重要な鳥類についてはそれぞれ最高出現数と1操業あたりの平均出現数を () 内に示した。鳥の学名は最後に一覧表で示した。

<航海①>

硫黄島近海ではオナガミズナギドリ (最高70羽, 平均19羽) が最も重要な指標となっており、次いでカツオドリ (最高10羽, 平均2羽) やセグロアジサシ (最高5羽, 平均1.2羽) 等が魚群に付いていた。

マリアナ諸島近海の北緯21°以北ではセグロアジサシ (最高130羽, 平均68羽) が多く、次いでオナガミズナギドリ (最高5羽, 平均2羽) 等が重要種であった。

マリアナ近海の北緯19°～20°付近ではクロアジサシ (最高310羽, 平均60羽) やアカアシカツオドリ (最高80羽, 平均20羽) が重要種で、次いでオナガミズナギドリ (最高15羽, 平均5羽) 等が魚群についていた。

<航海②>

硫黄島近海ではオナガミズナギドリ (最高280羽, 平均49羽) が多く、次い

でセグロアジサシ（最高6羽，平均1.5羽），カツオドリ（最高9羽，平均1.3羽）等が見られた。

マリアナ近海の北緯21°以北ではセグロアジサシ（最高55羽，平均31羽）とオナガミズナギドリ（最高55羽，平均15羽）が多く，次いでアカアシミズナギドリ（最高5羽，平均2羽）等が見られた。

マリアナ近海の北緯19°～20°付近ではクロアジサシ（最高210羽，平均66羽）とセグロアジサシ（最高280羽，平均38羽）が多く，次いでオナガミズナギドリ（最高95羽，平均10羽），アカアシカツオドリ（最高10羽，平均4羽）等が見られた。

マリアナ近海の北緯18°付近ではセグロアジサシ（最高200羽，平均78羽），オナガミズナギドリ（最高35羽，平均14羽）が多く，次いでアカアシカツオドリ（最高2羽）等が見られた。

なお，航海①及び②の操業中，鳥群の個体数の大きさと釣獲による水揚げとの間に相関関係は見られなかった。これは，カツオ魚群がエサ（小魚）を追いつけていわず餌床（小魚の密集した塊）を形成する時期と鳥群がその状況を察知してその場所に集まってくる時期と魚船がその同じ場所に到着する時期の，3つのタイミングがいろいろな風に時間的にずれるのが最大原因であろう。

次に，航海①及び②の操業中に見られたその他の鳥種を下に記す。これらのものは魚群の指標として殆んど役に立たなかった。（ ）内に最高出現数を示す。

シロアジサシ（6），腰の白くないウミツバメ（6），オガサワラミズナギドリ（5），シロハラミズナギドリ1種（5），グンカンドリ1種（3），アカオネツタイチョウ（1），シラオネツタイチョウ（1），ヒメクロアジサシ（1）及び疑問的であるが，アナドリ？（5），ナンヨウマミジロアジサシ？（1）。

＜航海③＞

銭洲付近の操業ではオオミズナギドリ（最高260羽，平均165羽）だけが見られ，重要な指標となっていた。

ベヨネズ列岩付近ではオオミズナギドリ（最高370羽，平均120羽）が多く，他にはハシボソミズナギドリ（最高50羽），セグロアジサシ（1羽），アジサシ1種（1羽），腰の白くないウミツバメ（3羽）等が見られた。

ソーフ岩付近では魚群はすべて素群（すなむれ＝鳥やその他の動物，漂流物等が付いていない魚群）で，鳥群は操業する魚船の船尾に従うだけであり，魚群の指標にはならなかった。

<航海④>

西の瀬付近の操業ではオオミズナギドリ（最高70羽）とセグロアジサシ（最高22羽）が重要な指標であった。

ソーフ岩付近の操業はすべて素群によった。

なお、航海③及び④のソーフ岩付近の操業で、船尾に従った鳥種とその最高出現数を下に記す。

オナガミズナギドリ（300）、クロアジサシ（150）、ハシボソミズナギドリ（5）、腰の白くないウミツバメ（5）、セグロアジサシ（5）、オオアジサシ（2）、オオミズナギドリ（1）、カツオドリ（1）。

<航海⑤>

東沖（35°N, 145°E）の操業では、オナガミズナギドリ（最高50羽）とオオミズナギドリ（最高65羽）が多く、魚群の指標となっていた。その他にはシロハラミズナギドリ（3羽）と腰の白くないウミツバメ（1羽）が見られた。

利根川沖（35°N, 141°E）ではオオミズナギドリ（最高300羽）及びクロコシジロウミツバメ（最高35羽）が魚群の指標となっていた。

前出した鳥種の学名

アカアシカツオドリ	<i>Sula sula</i>
アカオネツタイチョウ	<i>Phaethon rubricauda</i>
アジサシ 1 種	<i>Sterna</i> sp.
アナドリ	<i>Bulweria bulwerii</i>
ウミツバメ 1 種	<i>Oceanodroma</i> sp.
オオアジサシ	<i>Thalasseus bergii</i>
オオミズナギドリ	<i>Calonectris leucomelas</i>
オガサワラミズナギドリ	<i>Puffinus lherminieri</i>
オナガミズナギドリ	<i>Puffinus pacificus</i>
カツオドリ	<i>Sula leucogaster</i>
クロアジサシ	<i>Anous stolidus</i>
クロコシジロウミツバメ	<i>Oceanodroma castro</i>
ゲンカンドリ 1 種	<i>Fregata</i> sp.
シラオネツタイチョウ	<i>Phaethon lepturus</i>
シロアジサシ	<i>Gygis alba</i>
シロハラミズナギドリ 1 種	<i>Pterodroma</i> sp.
セグロアジサシ	<i>Sterna fuscata</i>
ナンヨウマミジロアジサシ	<i>Sterna lunata</i>

ハシボソミズナギドリ

Puffinus tenuirostris

ヒメクロアジサシ

Anous minutus

引用文献

- 木村喜之助 1954: カツオ群の性状 (第1報) 東北海区水産研究所研究報告 3: 1-87.
 富永盛治郎 1957: 鰐——習性と漁法 石崎書店.
 杉崎 一雄 1968: カツオ漁船による海鳥カウント, 鳥 85.

東京湾新浜地区の秋の鳥

東京湾江戸川河口一帯の新浜地区は、従来から渡り鳥の集散地として著名だが、近年開発が進み環境が悪化し、その面影を失いつつあり、この地域を渡り鳥の集散地として守ろうという運動が行なわれているが、埋立、工場建設が日毎に進められている。しかし、開発途上の埋立工事で一時的に出現した広大な干潟や草地に、多くの鳥が渡来し、昭和43年の秋には、野鳥の会の若い会員で作っている新浜グループによって、記録された珍鳥の類は、今までにないほど多かった。その主なものをあげて、参考に供する。

アカアシシギ	9/29 (1)
ハリモモチユウジャクシギ	9/29~10/10 (1)
コシヤクシギ	9/1 (1), 9/29~10/10 (1)
アメリカウズラシギ	8/4 (1), 9/29 (1), 10/20 (2)
ヒメウズラシギ	10/10 (1)
エリマキシギ	9/29 (20)
ハリオシギ	9/15~9/29 (1)
ハイイロペリカン	9/22 (1)
チゴハヤブサ	10/13 (1)
コチヨウゲンボウ	10/13 (1)
マミジロツメナガセキレイ	11/3 (1)
ムギマキ	10/27 (2)
クロジ	10/27 (1), 11/3 (4)

() 内の数字は個体数を示す。

(由井正敏記)